令和 7 年 度
宮崎国際大学 教育学部
一般選抜後期

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

次の文章は、教育学博士であり小学校の教諭でもある岸圭介^{ましけいすけ}さんが、「ことばの教育」について述べたものです。岸さんの意見を要約するとともに、あなたが子どもたちを教える立場に立ったとき、どのようにことばを使っていきたいか、600字以内で述べなさい。

小学校のときの教室を思い起こしてください。

たまに隣のクラスの先生が入ってくると、いつもと違う緊張感が走るがあります。教室の雰囲気は、どの先生が来たかによって違ったはずです。

しんとしている教室で「なぜみんなこんなにしずかなの？」と聞いてみたら、「だって、〇〇先生の授業だから」なんて素直な答えが返ってくることもあるかもしれませんね。先生によって、子どもの反応は変わるものです。

でも、その引き締まった空気もまた教師の「ことば」がつくっているのです。

その先生の「少ししずかにしよう」という一言は、おそらく他の先生とは重みが違います。場合によっては、他の先生の「もっとしずかにしよう」よりも効果があることでしょう。

だから、子どもと正しくコミュニケーションをとりたいのであれば、まずことばが届く人になることをめざすべきです。

これは決して暴力的に子どもを支配したり、強制的に物事を進めたりした方がいいという意味ではありません。大事なのは、一回のことばを真剣に届けようとする姿勢そのものにあります。

おだやかな性格の持ち主であっても、ゆっくりと一言ひとことをかみしめながら話す人を見ると、思わず聞き入ってしまうことがあります。じっくりと時間をかけて、ことばをていねいに選びながら話す様子から、わたしたちはその人が放つことばの重みを自然と感じとっているのです。

これは一対一のやりとりだけではなく、一人が大勢の前で話す場合も同じです。

例えば教師がクラスで「全員がこちらを向いたら、話をします」と口にしたら、その場に居る児童全員がしっかり向くのを確認してから話をはじめなければいけません。

子どもは、教師がどうふるまうかによって、本気度を測っています。もしここで全員がこちらを向く前に話をしてしまえば、子どもは「言っていることとやっていることが違う」と即座に判断して、その教師のことばに耳を傾けようとはしないでしょう。

なぜなら、ことばが軽いからです。

ことばの価値は、話し手の行動と必ずセットになる。これが鉄則です。

「自分の言ったことに責任をもつ」ということばがあります。ことばの価値がいかに話し手と結びついているかを示していますね。

子どもに注意をするとき、できるだけ一度でそのことを止めさせるように大人は努めるべきです。自分自身のことばに重みをもたせることにつながるからです。

その意味で「何回言えばわかるの」ということばは、簡単に言うてはいけないことばなの

です。ここをまず修正しなければいけません。

「ことばの教育」を考えると、教育する側にいる立場の人がどのようにことばを使っているかは、大きな問題です。

口にしたことは、必ず守る・守らせるということが、ことばの価値を高めるいちばんの方法です。「この人の言ったことには重みがある」、「この人の言うことなら信じられる」といった確かな実感が、ことばの意味をさらに重厚なものにしていくのです。

(岸圭介『学力は「ごめんなさい」にあらわれる』による)